



エラスムス・プラス 2018 Staff Training Week 研修報告

木本真弓（研究協力課研究協力係）

報告者は、Erasmus+の助成を受け、6月4日～8日にスペインのバスク大学にて開催された2018 Staff Training Weekに参加した。

Erasmus とは、欧州内での学生流動を促進するために1985年にはじめられたプログラムで、もともとはEU内を対象だったが、その後 Erasmus Mundus という第三国を対象にしたものが作られ、さらに対象国を広げた Erasmus+が2014年に開始された。

主要プログラムの一つである International Credit Mobility(ICM)は、教員や職員の交流も対象としており、本研修も ICM の一環である。本学では、学生や教員のカテゴリーでの参加はあったが、Staff Training のカテゴリーに参加するのは初めてだった。

研修が開催されたバスク大学は、スペイン北東部、バスク州に位置し、北側は大西洋のビスケー湾に面している。この地域は、バスク語およびバスク文化という固有の文化が維持されており、キャンパス内の看板などは、ほぼすべてバスク語とスペイン語が併記されていた。

ギプスカヤ、アラバ、ビスカヤというバスク州の主要3県それぞれにキャンパスを持ち、学生数は45,000人、教員・研究員数5,400人、職員数1,800人。また60か国、1500以上の協定校を持っている(2018年6月現在)。人文学部の他、工学部や経済学部、健康科学部、自然科学部などがある。

今回行われた Staff Training Week の基本的な目的は3つあり、バスク大学とその国際交流に関するサービスを知ること、バスク大学も含めた各大学の国際交流関係担当職員と知り合うこと、そして、相互の国際交流に関するポリシーや実務を知り、それぞれの大学の実務に生かすことだった。

参加者は、16か国31名で、報告者以外、実際に国際関係の業務や留学業務に携わる実務者だった。各参加者は、以下のような国際交流・留学に関連するテーマから一つを担当し、プレゼンを行った。「Policies on international mobility partnership」、「Best practices on services for incoming students」、「Erasmus + International Credit Mobility KA107」、「Online/digital/paperless procedures/systems to manage international exchanges」、

「Experiences in double/joint degrees」、 「Ways to motivate to study abroad」

研修プログラムでは、ワークショップやプレゼンの他にも、ボートトリップや博物館見学などのアクティビティが用意されており、バスクの風土と文化を知ることができた。また日が長く、遅い時間まで人通りがあったため、プログラム後にも、研修参加者と交流を深めることができた。

この研修は、実務経験のない分野の海外研修、さらに英語のプレゼンを行う必要があり、報告者にとっては大きなチャレンジではあったが、事前準備やプレゼン資料作成作業を通じ、本学の国際化の現状を知ることができた点、また同時に、他大学の参加者のプレゼン等を通じて、バスク大学を含めた他の大学のこと、および、その国際化や留学へ向けた取り組みを知ることができたという点で、大変意義のあるものだった。

とくにヨーロッパ内での国際交流というのは、エラスムス・プラスのような助成もあり大変充実していることを知り、本学の留学を促進し、留学生を確保するにはどうすればいいか、本学の国際化のために事務職員として自分ができることは何かを考えるきっかけを得ることができた。

また、他大学のスペシャリストと時間を共有できたことで、自身の業務に対して、より高い意識を持つ必要があることを再認識した。

今後も、引き続き、この研修で得たものを業務や自身のスキルアップに生かしていきたいと思う。

